

論文

The Woman in White における ‘sensation’ とは

橋野 朋子

はじめに センセーション小説をめぐる議論における ‘sensation’

1859年から1860年にかけて Charles Dickens 編集の *All the Year Round* に連載され、1860年8月に三巻本で出版された Wilkie Collins の *The Woman in White* は、Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* (1861-2) や Ellen Wood の *East Lynne* (1861) などと共に「センセーション小説」(sensation novel) と呼ばれる新たなジャンルの一大流行を引き起こした。しかし、センセーション小説の先駆的な作品として位置づけられているものの、*The Woman in White* に関する出版当初の書評において ‘sensation’ という言葉が使われている例は見受けられない。

Kathleen Tillotson は、‘The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties’ と題した論文の中で ‘sensation novel’ という名称を用いた最も早い時期の記述が1861年9月の *The Sixpenny Magazine* に見られることを指摘している。¹ 確かにジャンルの名称として ‘sensation novel’ という用語を用いた記述はそれ以前には見当たらない。しかし、その1ヶ月前の1861年8月、*Fraser's Magazine* の ‘Novels of the Day’ と題した論評において ‘sensation’ という単語が次のような文脈の中で使われている。

The faults of the French school are creeping into our literature, and threaten to flourish there. The morbid analysis of sentiments which we have already reprobated, bids fair to be succeeded by an equally morbid analysis of mere sensation.²

この一文は、いわゆる「センセーション小説」の流行が *The Woman in White* の三巻本での出版時点で始まりつつあったことをうかがわせるものである。また、‘sensation novel’ という用語が用いられている最も早い時期の例として指摘されている *The Sixpenny Magazine* の ‘Literature of the Month’ は次のような文で始まる。

Very remarkable are the changes that manifest themselves in the public taste, particularly in things of an intellectual character. Take, for instance, that extremely popular production, known as the *sensation novel*.³

‘sensation novel’ という言葉がイタリック体になっており、名称として ‘sensation novel’ という言葉がすでに定着していることが推察される。その年の末には *The Spectator* が「我々は新種のセンセーション小説の脅威にさらされている」(We are threatened with a new variety of the sensation novel)⁴ と記しており、数多くのセンセーション小説が続々と書かれる状況にあったことがうかがえる。1862年から翌年にかけては ‘sensation novel’ と題した論説が *Blackwood's Edinburgh Magazine* や *Quarterly Review* などに見られるだけでなく、⁵ 医学的雑誌である *Medical Critic and Psychological Journal* も ‘sensation novel’ と題して、センセーション小説の流行を無視できない社会的現象としてとりあげている。⁶

OED は ‘sensation’ という言葉を①「五感の働き」(the operation or function of the senses) ②「心情・感情」(a mental feeling, an emotion) ③「興奮・強烈な感情」(an excited or violent feeling) という3つの定義に分けている。*Quarterly Review* が「刺激のみがセンセーション小説の偉大な目標のようである」(Excitement, and excitement alone, seems to be the great end at which they aim.)⁷ と非難しているように、1860年代始めに多くの雑誌で繰り広げられたセンセーション小説をめぐる議論において、‘sensation’ という言葉は「興奮」「刺激」と同義であり、OEDにおける定義③にあたる。当時のセンセーション小説をめぐる議論においては、読者の「好奇心」を煽ることのみを目的とした手段としての ‘sensation’ が問題視されている。

1. 評価における *The Woman in White* と他のセンセーション小説との差別化⁸

The Woman in White も三巻本での出版当初、読者の好奇心を刺激する作風が批判の対象となった。例えば、*Critic* は「作品全体において強烈な刺激のために全てが犠牲にされている傾向にある」(the general tendency of the book to sacrifice everything to intensity of excitement)⁹ 点を指摘し、「読者の好奇心をかき立て、神経を昂らせる」(it rouses your curiosity, it thrills your nerves)¹⁰ ことに主眼があることを批判している。また *Saturday Review* も同様に、「褒めるべき点は読者の好奇心がそそられ続ける手腕ぐらいのものだ」(All that is left us is to admire the art with which the curiosity was excited.)¹¹ と論じている。このように、出版当初 *The Woman in White* に向けられた批判には 'sensation' という言葉が使われていないものの、'curiosity' や 'excitement' などの言葉が顕著であり、その批判の趣旨は後に続いたセンセーション小説をめぐる議論における批判と共通していると言える。

しかし、センセーション小説の流行に伴い、どの雑誌においても 'sensation' と言えばセンセーション小説特有の「興奮・刺激」を意味するようになるにつれて、*The Woman in White* に対する評価に変化が見られるようになる。1861年12月28日付けの *The Spectator* は、「*The Woman in White* は謎解きとしての質が完璧であるがゆえに許容範囲である」(The "Woman in White" was endurable simply because the mystery to be unravelled was of its kind perfect) とし、「模倣者の大群が同レベルのプロットを編み出すことは不可能に近いであろう」(there is not the slightest probability that the swarm of imitators will construct plots nearly so good)¹² と論じている。

また、センセーション小説の流行を無視できない社会現象として取り上げた先述の *Medical Critic and Psychological Journal* は、次のようにセンセーション小説作家たちの力量のなさを批判している。

Among possible explanations of the problem, a prominent place may be assigned to feebleness of writing, and want of inventive power on the part of authors, leading them to supply deficient interest by horri-

ble and startling incidents, or by the introduction of characters that appeal to a morbid and prurient curiosity.

そして続いて、「そのような批判はセンセーション小説の創始者たちにあてはまるものでない」(This explanation, however, does not in any way apply to masters of the art, or as a rule, to the originators of the 'sensation novel' movement)¹³ と述べ、*The Woman in White* と後に続いたセンセーション小説とを区別している。同様に、*The Woman in White* を連載した *All the Year Round* もセンセーション小説の流行に関して、「一部の少数者の真摯な気持ちによって行われ始めたことが、効果的であるというだけの理由で多数の追随者によって模倣されるのは一時的な流行りによくあることだ」(a species of cant, which, originating, as cant generally does, in a sincere feeling on the part of a few, has been echoed by the many simply because it is an effective cry)¹⁴ と論じている。

このように、1860年代前半のセンセーション小説をめぐる論争において批判の対象となっていたのは、流行の火付け役となった *The Woman in White* ではなく後に続いたセンセーション小説作家たちであった。

2. 問題視される「不自然」な 'sensation' — *The Woman in White* と他のセンセーション小説との違い

センセーション小説が当時多くの非難を浴びたのは、もちろん作品が読者の好奇心を昂ぶらせる「刺激」に満ちているという理由からであったが、当時の様々な批判を総合的に見ると、問題視されているのは、単に「刺激」に満ちていることではなく、その「刺激」が「不自然」であることのようなのである。「刺激のみがセンセーション小説の偉大な目標のようである」と指摘する先述の *Quarterly Review* はその「刺激」を「不自然な刺激」(unnatural excitement)¹⁵ と表現している。また、先述の *The Sixpenny Magazine* の 'Literature of the Month' は、センセーション小説を三種類に分類し、第一のグループに 'nature' すなわち「現実・自然の摂理」に忠実に描かれているものとして *A Tale of Two Cities* や *Adam Bede* を挙げ、第二のグループには、多

少の誇張が見られるもののそれなりの芸術性が認められるものとして *The Woman in White*、*Great Expectations*、*Jane Eyre*などを挙げ、第三のグループには「自然の摂理が全く無視されている」(nature is entirely disregarded)ものとして他のセンセーション小説を分類している。¹⁶ 他のセンセーション小説と区別され第二のグループに分類された *The Woman in White*は「センセーション小説の最大の成功例」(the greatest success in sensation writing)¹⁷と評価されている。

多くの議論において問題視されている「不自然な刺激」とは、センセーション小説の中で溢れている「殺人」、「犯罪」、「重婚」、「駆け落ち」などのことであり、それらは本来非日常的な事柄であるはずであり、よって「不自然」であるというのがその主張である。1866年出版の *The Gay Science*の中で、センセーション小説の流行に対して批判的な知識層の見解を否定し、センセーション小説を擁護する姿勢を見せている批評家 E. S. Dallasも、¹⁸ 「不自然な」状況設定によってセンセーション効果をねらうことに対しては批判的であり、女性が小説の主人公として設定された場合を例にとって次のように主張している。

When women are . . . put forward to lead the action of a plot, they must be urged into a false position. . . the novelist finds that to make an effect he has to give up his heroine to bigamy, to murder, to child-bearing by stealth in the Tyrol, and to all sorts of adventures which can only signify her fall. The very prominence of the position which women occupy in recent fiction leads by natural process to their appearing in a light which is not good. This is what is called sensation. It is not wrong to make a sensation; but if the novelist depends for his sensation upon the action of woman, the chances are that he will attain his end by unnatural means. (emphasis, added.)¹⁹

一方、出版当初は新奇さゆえに多くの批判を受けた *The Woman in White* がセンセーション小説の流行に伴い徐々に評価されるようになった最大の理由は、後に続いたセンセーション小説とは対照的に *The Woman in White*

が、作品中に「殺人」も「流血」も「婦女誘惑」も存在せず、読者の好奇心を巧みにかきたてながらも、最終的に主人公が苦難を乗り越えてヒロインと結婚するという、いわゆる伝統的な小説スタイルを保っている点にあると思われる。

この点に関して、Margaret Oliphantは *Blackwood's Edinburgh Magazine* の 'sensation novel' と題した論説の中で次のように述べている。

We cannot object to the means by which he startles and thrills his readers; everything is legitimate, natural, and possible; all the exaggerations of excitement are carefully eschewed, and there is almost as little that is objectionable in this highly-wrought sensation-novel, as if it had been a domestic history of the most gentle and unexcited kind. (emphasis, added.)²⁰

このように、Oliphantは *The Woman in White* において大げさな場面や刺激的要素が注意深く避けられている点を高く評価しており、同論説の別の箇所ではCollinsのその慎重さが他のセンセーション小説作家に欠けている点であるとも指摘している。²¹

当時の多くの批評家たちは読者がこぞってセンセーション小説をむさぼり読む現象を受けて、そのような「刺激を求める社会的傾向」(popular craving for excitement)²²を「病んだ欲求」(cravings of a diseased appetite)²³など、病的なイメージで表現し、「社会的な堕落を示すもの」(indications of a wide-spread corruption)²⁴として捉えている。彼らの懸念は主として「若い女性読者」(the rising generation of young women and girls)²⁵への影響であり、センセーション小説全般が「不自然」な状況設定によって読者の「不健全で好色な好奇心」(a morbid and prurient curiosity)²⁶を刺激していることに対して強い不快感を示している。それに対して、*The Woman in White*はOliphantが指摘するようにそのような要素が注意深く避けられている作品であり、その点が *The Woman in White* が他のセンセーション小説と区別して評価されている所以であると言えよう。

3. The Woman in White の ‘sensation’

Oliphant は、慎重かつ巧みに描き出されることによって「真のセンセーション効果」(genuine power of sensation)²⁷ が発揮されている例として具体的に *The Woman in White* の二つの場面を取り上げている。

一つは主人公 Hartright が人気のない夜道で突然背後から全身白づくめの女性に呼び止められるシーンであり、もう一つは、月明かりの中、白い衣服をまとって庭を歩く Laura の姿を眺めながら、Hartright が Marian とのやりとりを通して夜道出会った女性と目の前の Laura との類似性に初めてはっとする瞬間である。Oliphant は次のように説明している。

... these two startling points of this story do not take their power from character, or from passion, or any intellectual or emotional influence. The effect is pure sensation, neither more nor less; and so much reticence, reserve, and delicacy is in the means employed, there is such an entire absence of exaggeration or any meretricious auxiliaries, that the reader feels his own sensation made upon him.²⁸

この二つの場面、すなわち Hartright が白衣の女性に出会ってから Laura とその女性との類似性を認識するに至るまでの間、実は、作品中では要所要所に ‘sensation’ という言葉そのものが用いられているのである。作品の他の部分と比較するとその頻度は特異である。‘sensation’ という言葉が *The Woman in White* の中でどのような状況において用いられているのかを具体的に見ていきたい。

The Woman in White の作品中で ‘sensation’ という語が最初に用いられるのは、まさに Oliphant が最も効果的なセンセーション・シーンの一つとして指摘している、白衣の女性に Hartright が呼び止められる場面である。Hartright はロンドンへ向かう夜道を歩いていた自分を次のように描写している。

... my mind remained passively open to the impressions produced by

the view; and I thought but little on any subject — indeed, so far as my own sensations were concerned, I can hardly say that I thought at all. (emphasis, added.)²⁹

この場合の ‘sensation(s)’ は、*OED* における定義①「五感の働き」(the operation or function of the senses) としての「感覚」にあたり、Hartright は無の境地で感覚的に研ぎ澄まされた状態にあったと言える。そのような状況下で彼は突然背後から肩を触れられたのである。

そのようなスリルに満ちた体験の後に彼が夜遅く絵の家庭教師としての新しい赴任先である Limmeridge 邸に到着した時には、すでに屋敷の住人は皆寝静まっており、彼はそのまま自室に通されベッドに入る。その際、彼はその家の誰一人とも面識すらないのにまるで一家の友人であるかのように寝泊りすることに「奇妙な感覚」(a strange sensation) (57) を覚える。そして翌朝目覚めブラインドを上げた Hartright は、未知の景色を目の前にして次のような不思議な感覚に襲われる。

A confused sensation of having suddenly lost my familiarity with the past, without acquiring any additional clearness of idea in reference to the present or the future, took possession of my mind. (emphasis, added.) (57)

そして朝の身支度を済ませて階下へ降りた Hartright は初めて Marian に会う。彼女の優美な後ろ姿に心打たれた Hartright は、振り返り近づいてくる彼女がその後ろ姿にはあまりにそぐわない男性的な風貌であるのを見て、再度不思議な感覚に襲われる。その感覚を彼は、「夢の中のつじつまの合わないことに対して感じるような不快感に近い感覚」(a sensation oddly akin to the helpless discomfort familiar to us all in sleep) (59) であると説明している。続いて初めて Laura を紹介された彼はその印象を次のように述べている。

Among the sensations that crowded on me, when my eyes first looked upon her — familiar sensations which we all know, which spring to

life in most of our hearts, die again in so many, and renew their bright existence in so few — there was one that troubled and perplexed me: one that seemed strangely inconsistent and unaccountably out of place in Miss Fairlie's presence. (emphasis, added.) (76)

Hartrightは「我々が皆よく知る感情」、すなわち恋の芽生えを感じる一方で、同時になんとも説明のつかない「感覚」(sensation)に悩まされている。それはLauraという女性から受ける印象とは調和しない「違和感」のようなものと言える。

Limmeridge 邸に赴き新しい生活の幕開けを迎えたHartrightは、以上見てきたように、度々、説明のつかない不思議な「感覚」(sensation)に襲われている。これらはOEDでの定義②「心情・感情」(a mental feeling, an emotion)にあたり、いずれも共通して「不調和」からくる「不快感」、「違和感」、「不安感」を表し、未知の領域に足を踏み入れ、心の安定を保てないでいるHartrightの心理状態を反映していると言えよう。Limmeridge邸で初めての朝を迎え突然過去との接点を失ったような感覚に襲われた際、Hartrightはさらに次のように述べていた。

Circumstances that were but a few days old faded back in my memory, as if they had happened months and months since. . . the farewell evening I had passed with my mother and sister; even my mysterious adventure on the way home from Hampstead — had all become like events which might have occurred at some former epoch of my existence. (57-58)

この記述は、Hartrightが足を踏み入れたLimmeridge邸が、「安らぎの空間」の象徴としての母の家からは時間的にも空間的にも隔絶した「未知の領域」であることを読者に印象づけようとするものであると言えよう。

そしてストーリーはOliphantが「最も慎重かつ巧みなセンセーション・シーン」として二つ目に挙げている場面を迎える。Hartrightは、白い衣服をまとい月明かりの中で庭を散策するLauraを眺めながら、部屋の中で

Marianの話しに耳を傾けている。Marianは亡き母の遺物の中から見つけたある手紙を読み上げていた。その手紙にはMarianとLauraの母が生前気にかけて可愛がっていたある少女に白い服を作ってやった際に、その少女が一生白い衣服以外は着ないことを誓って感謝を示したエピソードが記されていた。手紙を途中まで読み上げたMarianは、Hartrightが夜道出会った白衣の女性はその少女なのではないかと指摘する。

庭をさまようLauraの白いドレスをじっと見つめながら話に耳を傾けていたHartrightは、その瞬間の感覚を次のように述べている。

My eyes fixed upon the white gleam of her muslin gown and head-dress in the moonlight, and a sensation, for which I can find no name — a sensation that quickened my pulse, and raised a fluttering at my heart — began to steal over me. (emphasis, added.) (85)

そして、手紙が最後のくだりにさしかかり、その少女がふとした時にある人物によく似た表情を見せるということが書かれた部分をMarianが読みあげた瞬間、速まる脈拍と高鳴る心臓の鼓動を感じながら耳を傾けていたHartrightは、人気のない夜道で白衣の女性の手が肩に触れた時に感じたのと同じ「戦慄」(thrill)が全身を走るのを感じると同時に、目の前のLauraと白衣の女性との類似性に気付く。その稲妻に打たれたような感覚を彼は次のように述べている。

A thrill of the same feeling which ran through me when the touch was laid upon my shoulder on the lonely high-road chilled me again.

There stood Miss Fairlie, a white figure, alone in the moonlight; in her attitude, in the turn of her head, in her complexion, in the shape of her face, the living image, at that distance and under those circumstances, of the woman in white! The doubt which had troubled my mind for hours and hours past flashed into conviction in an instant. That 'something wanting' was my own recognition of the ominous likeness between the fugitive from the asylum and my pupil at

Limmeridge House. (86)

Laura を初めて見た時に Hartright が感じた「違和感」は、彼女の白衣の女性との類似性からくるものであったことがここではっきりしたものの、それは読者にとって更に謎を呼ぶ事実であり、今後のストーリー展開に不吉な予感を禁じ得ない。

このように、Hartright が白衣の女性に出くわす場面以降ところどころに用いられている ‘sensation’ という言葉は、「未知の領域」に足を踏み入れていく Hartright の心の安定を欠いた心理状態を反映すると同時に、同様の「漠然たる不安感」を読者にも抱かせる効果を持っていると言えよう。要所要所に使われている ‘sensation’ という言葉によって徐々に読者の不安はつのり、この手紙のシーンでクライマックスを迎えるが、Laura と白衣の女性の類似性という不気味な事実が明らかになり、ストーリーの今後の展開に対する読者の不吉な予感は更につるのである。

おわりに ‘sensation’ の扱いに見られる Collins の独自性

‘sensation’ という言葉は以上見てきたように、*The Woman in White* の作品中、主に、白衣の女性との遭遇シーンから Hartright が Laura と白衣の女性との類似性を認識するまでの作品前半のごく一部に集中して用いられている。しかもこのように「感覚」、「心情」という意味で用いられている例は作品の他の箇所にはない。

そもそも同時代の小説において作品中に ‘sensation’ という言葉が使用される頻度は決して多いとは言えない。1850年代流行していた「ドメスティック小説」の代表作である *John Halifax, Gentleman* (1856) では、‘A decided sensation at upper half of the room’ という文脈において使われている一例のみである。³⁰ ここでの ‘sensation’ の意味は *OED* での定義③「興奮・強烈な感情」(an excited or violent feeling) 中の「何かがかきつけで群衆の中に沸き上がるどよめき」(a condition of excited feeling produced in a community by some occurrence) にあたる。*All the Year Round* において *The Woman in White* の直前に連載されていた Dickens の *A Tale of Two Cities* (1859) でも3

例のみであり、それらのうち2例は *John Halifax, Gentleman* 同様「どよめき」の意味で使われている。³¹ もちろん、「どよめき」の意味のほか「感覚」の意味で使用されている例も決して少なくはない。*All the Year Round* で *The Woman in White* に続いて連載された *Great Expectations* (1861) では「どよめき」の意味で用いられているのが2例であり、「感覚」の意味で用いられているのが3例である。³² *The Woman in White* と並んでセンセーション小説の流行の火付け役となった Braddon の *Lady Audley's Secret* では ‘sensation’ の使用は3例見られるが、「どよめき」の意味では用いられず、「感覚」や「心情」の意味で用いられている。³³ しかしながら、Dickens の *Bleak House* (1852) では約10例のうち半分以上が「どよめき」の意味であり、また、その他様々な作品で見ても、やはり ‘sensation’ という言葉は「どよめき」の意味で使われていることのほうが多いようである。

それに対して、*The Woman in White* では10例を超える ‘sensation’ のうち「どよめき」の意味で使われているのは1例のみである。この違いからも分かるように、Collins は意識的に ‘sensation’ という言葉を使っていたのではないであろうか。Collins の50年代の作品には ‘sensation’ という言葉が少なからず用いられており、とりわけ、既存の小説スタイルに挑戦する形で書かれた初期の小説 *Basil* (1852) ではその数は20以上にも及ぶ。同時代の作品と比較すると、これは非常に特異なことであると言える。50年代の Collins 作品における ‘sensation’ の意味は多様性に富み、*Basil* において ‘sensation’ は「感覚」の意味で使われている場合でも、単なる「意識」という意味から背筋の凍るような「戦慄」の他、性的な意味合いまで、その意味は多岐にわたる。

‘sensation’ という言葉が作品中いたるところで様々な意味で用いられている *Basil* に対して、*The Woman in White* では、それらはストーリーが様々な展開を見せる前の前半のごく一部に集中して使われている。そして今まで見てきたように、それらのほぼどれもが共通して、‘a strange sensation’、‘a confused sensation’、‘a sensation oddly akin to the helpless discomfort’ など、得体が知れず名状しがたい「違和感」を表している。Limmeridge 邸での未知の世界に足を踏み入れようとする主人公 Hartright が体感するこのような感覚は、今後の展開を読み進めていく読者に「漠然たる不安」を与える効果

を持つ。当時の批評家の多くは、読者が「刺激」としての ‘sensation’ を求めてセンセーション小説をむさぼり読む現象に対して警鐘を鳴らしたが、*The Woman in White*で読者が体感する ‘sensation’ はそれとは異質なものである。センセーション小説をめぐる議論で問題視された ‘sensation’ が「刺激・興奮」と同義であるのに対して、*The Woman in White*における ‘sensation’ は、「殺人」「犯罪」「重婚」などの具体的な形を持たない、「自然な」状況設定の中に混在する「漠然とした不安感」であり、それは「未知の領域」への「違和感」、「不安感」を表す ‘sensation’ という言葉自体によって巧みに演出されていたのである。

注

本稿は2006年11月18日、神戸女学院大学で開かれた日本ヴィクトリア朝文化研究学会第6回大会における口頭発表原稿に加筆・訂正を施したものである。

1. Kathleen Tillotson, “The Lighter Reading of the Eighteenth-Sixties”, in Introduction to Wilkie Collins, *The Woman in White*, (Boston, Mass: Dover, 1969) xii.
2. “Novels of the Day: their Writers and Readers,” *Fraser’s Magazine* Aug.1860: 210.
3. “Literature of the Month,” *The Sixpenny Magazine* 3 (Sep. 1861): 365.
4. “The Enigma Novel,” *The Spectator* 28 Dec. 1861: 1428.
5. Margaret Oliphant, “Sensation Novels,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* May. 1862: 564-584.
H. L. Mansel, “Sensation Novels,” *Quarterly Review* 113 (Apr. 1863): 481-515
6. “Sensation Novels,” *Medical Critic and Psychological Journal* 3 (1863): 513-519.
7. Mansel, 482.
8. センセーション小説を批判した *Quarterly Review* (Apr. 1863)の論説 “Sensation Novels”では、冒頭に *Lady Audley’s Secret* を含む、1859年から1863年にかけて出版された24の作品が「センセーション小説」として列挙されている。*Recommended to Mercy* (1862)、*The Last Days of a Bachelor* (1862)、*Nobly False* (1863)、*The Law of Divorce* (1861)、*The Old Roman Well* (1861) など。*The Woman in White* は含まれていない。
9. Unsigned review, *Critic* (25 Aug. 1860), in *Wilkie Collins: the Critical Heritage* ed. Norman Page (London: Routledge, 1974), 82.
10. Unsigned review, *Critic*, 82.
11. Unsigned review, *Saturday Review* (25 Aug. 1860), in *Wilkie Collins: the Critical Heritage*, 84.
12. “The Enigma Novel”, 1428.

13. “Sensation Novels,” *Medical Critic and Psychological Journal*, 514.
14. “The Sensational Williams,” *All the Year Round* 13 February 1864: 14.
15. Mansel, 512.
16. “Literature of the Month”, 366.
17. “Literature of the Month”, 568.
18. E.S.Dallasは *The Woman in White*が *All the Year Round*で連載され始める数ヶ月前、*Blackwood’s Edinburgh Magazine* (Jan. 1859)において、「知識・教育が一般に普及してきた中で大衆が『思考 (thought)』を休めて『感覚的なもの (sensation)』を求めるようになるのは必然である」(111)と述べ、「我々は「思考」を離れて「感覚」を養うべきだ (We should fly thought, and cultivate sensation.)」(112)とセンセーション小説の流行を予見するような主張をしている。
19. E. S. Dallas, *The Gay Science*, Vol. 2 (1866. Bristol: Thoemmes Press, 1999), 297.
20. Oliphant, 566.
21. Oliphant, 568.
22. “Sensation Novels,” *Medical Critic and Psychological Journal*, 514.
23. Mansel, 483.
24. Mansel, 482.
25. “Sensation Novels,” *Medical Critic and Psychological Journal*, 517.
26. “Sensation Novels,” *Medical Critic and Psychological Journal*, 514.
27. Oliphant, 574.
28. Oliphant, 572.
29. Wilkie Collins, *The Woman in White* (1859-60 London: Penguin Books, 1985), 47. 以下、同作品からの引用は本文中にページ数で示す。
30. Dinah Maria Craik, *John Halifax, Gentleman* (1856 Kessinger Publishing), 316.
31. *A Tale of Two Cities* における使用例は次のとおりである。
 - (a) “The form that was to be doomed to be so shamefully mangled, was the sight; the immortal creature that was to be so butchered and torn asunder, yielded the sensation.” Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (1859 Oxford: Oxford U.P., World’s Classics paperback, 1988), 72.
 - (b) “The picture produced an immense sensation in the little crowd; but all eyes, without comparing notes with other eyes, looked at Monsieur the Marquis.” *A Tale of Two Cities* 137.
 - (c) “It was the first time, except at the trial, of her ever hearing him refer to the period of his suffering. It gave her a strange and new sensation while his words were in her ears; and she remembered it long afterwards.” *A Tale of Two Cities*, 228.
32. *Great Expectations* における使用例は次のとおりである。
 - (a) “We were equals afterwards, as we had been before; but, afterwards at quiet times when I sat looking at Joe and thinking about him, I had a new sensation of feeling conscious that I was looking up to Joe in my heart.” Charles Dickens, *Great Expectations* (1860-1861. New York: W. W. Norton & Company, Inc., A Norton Critical Edition, 1999), 42.

- (b) “ ‘Were you at his performance, Joe?’ I inquired. ‘I were,’ said Joe, with emphasis and solemnity. ‘Was there a great sensation?’ ” *Great Expectations*, 170.
 - (c) “I felt the convict’s breathing, not only on the back of my head, but all along my spine. The sensation was like being touched in the marrow with some pungent and searching acid, and it set my very teeth on edge.” *Great Expectations*, 176.
 - (d) “As he had nothing else that his majority to come into, the event did not make a profound sensation in Barnard’s Inn.” *Great Expectations*, 271.
 - (e) “It was an odd sensation to see his very familiar face established quite at home in that very unfamiliar room and region;” *Great Expectations*, 279.
33. *Lady Audley’s Secret* における使用例は次のとおりである。
- (a) “. . . he might have gone down to his grave with a dim sense of some uneasy sensation which might be love or indignation, . . .” Mary Elizabeth Braddon, *Lady Audley’s Secret* (1860-61. Oxford: Oxford U.P., World’s Classics paperback, 1987), 61.
 - (b) “. . . ‘and there certainly are pleasanter sensations than that of standing up to one’s knees in cold water.’” *Lady Audley’s Secret*, 133.
 - (c) “A choking sensation in her throat seemed to straggle those false and plausible words, her only armour against her enemies.” *Lady Audley’s Secret*, 283.

‘Sensation’ in *The Woman in White*

Tomoko Hashino

The vogue of the ‘sensation novel’ aroused considerable discussion in many of the Victorian magazines of the early 1860s. In the contemporary discourse upon the ‘sensation novel’, the term ‘sensation’ was used in the sense of ‘excitement’. Many of the criticisms agreed upon the point that sensation novels were full of ‘unnatural’ excitements such as ‘crime’, ‘murder’, or ‘seduction’, which were, as they insisted, essentially ‘unusual’ matters. *The Woman in White*, which is regarded as the seminal work in the genre of sensation fiction, however, is exempted from such criticism. The reason that *The Woman in White* received a different reception from contemporary critics seems to lie in the fact that the novel skilfully arouses readers’ curiosity in ‘natural’ circumstances, as Margaret Oliphant insists that “everything is legitimate, natural, and possible” in *The Woman in White* (‘Sensation Novels.’ *Blackwood’s Edinburgh Magazine*, Apr. 1863). In fact, the word ‘sensation’ itself is markedly used in the early part of the text, meaning the ‘strange’, ‘unfamiliar’ or ‘confused’ feelings that Hartright experiences. They reflect the unstable mental state of Hartright who has set foot in the unknown sphere of Limmeridge House. While the ‘sensation’ in many examples of sensation fiction that provoked Victorian criticism is synonymous with ‘excitement’, the ‘sensation’ that readers experience in *The Woman in White* is a ‘looming anxiety’ which arises through natural circumstances, and which is heightened by the word ‘sensation’ itself effectively employed in the text.